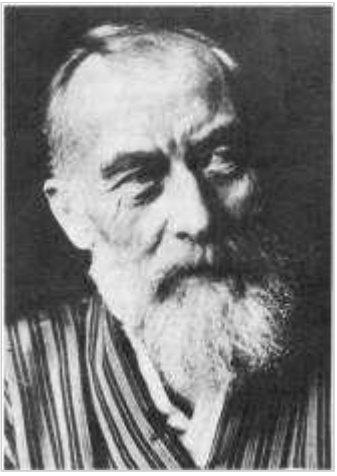
エルヴィン・フォン・ベルツ

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



エルヴィン・フォン・ベルツ

エルヴィン・フォン・ベルツ (Erwin von Bälz, 1849年1月13日 - 1913年8月31日) は、ドイツの医師で、お雇い外国人として日本に招かれ、27年にわたって医学を教え、医学界の発展に尽くした。また、草津・箱根を湯泉治療地として開発した。1905年には旭日大綬章を受賞。

目次

- 1 経歴
- 2 ベルツの日本観
- 3 草津温泉との関わり
- 4 ベルツ水
- 5 日本美術・工芸品の収集
- 6 ベルツ賞
- 7 関連著作
- 8 関連項目

経歴

- 1849年、南ドイツのビーティヒ・ハイムで生まれる。
- 1866年、チュービンゲン大学医学部に入学、1869年にライプツィヒ大学に転学、ウンダーリヒ教授の下で内科を修める。
- 1870年、軍医として普仏戦争に従軍。
- 1875年、ライプチヒ大学病院に入院中の日本人留学生相良玄貞をたまたま治療することになり、日本との縁が生まれる。
- 1876年、お雇い外国人として東京医学校 (現在の東京大学医学部) の教師に招かれる。
- 1881年、東海道御油宿戸田屋のハナコと結婚。
- 1902年、東京大学退官、宮内省侍医を勤める。
- 1905年、夫人とともにドイツへ帰国。熱帯医学会会長、人類学会東洋部長などを務める。
- 1913年、シュトゥットガルトにて死去 (64歳没) 。